

氏名	Kim Daewook
学位の種類	博士(神学)
報告番号	甲518号
学位授与年月日	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	Prophetic Conflicts in the Deuteronomistic History
審査委員	(主査) 長谷川 修一 (立教大学大学院キリスト教学研究科准教授) 廣石 望 (立教大学大学院キリスト教学研究科教授) Thomas C. Römer (Institut romand des sciences bibliques, Université de Lausanne & Milieux bibliques, Collège de France 教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

CONTENTS

1. Introduction

- 1.1. Aims of the Study
- 1.2. Texts
- 1.3. The Deuteronomistic History
- 1.4. Monotheism and Syncretism
- 1.5. Methods for the Study

2. Saul, the Dead Samuel and the Woman (1 Samuel 28:3–25)

- 2.1. Literary Analysis
- 2.2. Date
- 2.3. Religious Setting and Rhetorical Purposes
- 2.4. Summary

3. The Old Prophet's Deceit, Jeroboam's Golden Calves and the Disobedience of the Man of God (1 Kings 12:25–13:34)

- 3.1. Literary Analysis
- 3.2. Date
- 3.3. Religious Setting and Rhetorical Purposes
- 3.4. Summary

4. YHWH, Baal and Asherah (1 Kings 18:16–40)

- 4.1. Literary Analysis
- 4.2. Date
- 4.3. Religious Setting and Rhetorical Purposes
- 4.4. Summary

5. Ahab and Saul (1 Kings 22:1–38)

- 5.1. Literary Analysis
- 5.2. Date
- 5.3. Religious Setting and Rhetorical Purposes
- 5.4. Summary

6. Conclusion

BIBLIOGRAPHY

(2) 論文の内容要旨

本研究は、旧約聖書の申命記から列王記にわたる仮説的歴史叙述としての「申命記史」の中から、物語著者が同時代の読者へ発した使信を見定めるため、預言者間の争いを主題とする四つの物語を分析する。

第1章で、本研究で用いる概念定義、方法論の紹介、先行研究の概観がなされた後、第2章において、イスラエル王サウルが霊媒を通して神の意志を探るというサムエル記上28章の物語を分析する。文学的分析により、物語の持つ交差構造が霊媒を禁じる神へのサウルの不服従の非難を強調していること、召喚される預言者と霊媒師との類似性が、霊媒が神託を求めるために使われていた当時の混淆的状况を示していることが明らかにされる。

第3章は、真の預言者と偽りの預言者の特徴を主題とする列王記上12～13章の物語を取り上げる。物語の登場人物間の比較と描写される出来事の生じた場所の分析により、イスラエルの神を唯一の神として認識し、エルサレムを唯一の正当な崇拜場所とするよう読者を説得する物語著者の意図が明らかにされる。

第4章においては、イスラエルの神の預言者エリヤとカナンの神バアルの預言者との対決を描く列王記上18章が分析される。当時の社会でこれらの二神が融合されていたという仮定のもと、本研究はそれらの二神の間の際立つ対照に注意を向け、物語がイスラエルの神と他のいかなる神との融合をも否定する意図のもとに書かれていると論じる。

第5章では、イスラエル王アハブが、イスラエルの神の預言者たちが彼の勝利を預言したにもかかわらず戦いで命を落とす列王記上22章の物語を、列王記上20～22章の文脈に照らして解釈する。他の物語の登場人物や描写との比較により、アハブの勝利を預言した預言者たちが異教の神々の預言者に他ならないことを明らかにし、この物語がイスラエルの神の預言者を装う偽りの預言者を否定するものであると論じる。

これら四つの物語の分析に基づき、第6章では、「申命記史」著者たちが預言者間の論争そのものよりも、真のイスラエル、真の神、真の崇拜場所といった神学的問題により関心があったという結論に達する。したがって、預言者間の争いの物語は、エルサレムにおけるイスラエルの神の排他的崇拜を促進し、祭儀的混淆と戦い、それによってアケメネス朝支配下でヤハウエの共同体としての民族的アイデンティティを確立するために書かれたと結論する。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

アケメネス朝ペルシア時代は、イエフド（後のユダヤ）でヤハウエを崇拝していた集団が、後にキリスト教やイスラームが継承する唯一神観を確立した時代と一般的にみなされている。唯一神観は無から生まれたわけではなく、その時代の社会的・政治的状況下、それ以前の神学・イデオロギーを引き継ぎながら生み出された。したがって原ユダヤ教は、唯一神観的思想を推進するため、神々の混淆や他神崇拝といった伝統的ではあるものの唯一神観的思想と相反する思想との訣別を図った。本研究は、旧約聖書中の所謂「申命記史」の中に収められた預言者間の争いを描く四つの物語の丹念な分析によって、物語著者のこうした試みを明らかにする。著者はこうした争いが描かれた物語を、非難すべき祭儀伝統との関わりから離れるよう読者を説得し、イスラエルの神の排他的崇拝を促進するために著されたフィクションとみなす。

本研究の独自性は、テキストへの共時的アプローチと通時的アプローチを総合するというその方法にある。共時的分析はテキストの「最終形態」に焦点を絞り、テキストの歴史を等閑視するのに対し、通時的分析はテキスト形成史を重要視するため、両者の分析結果は時として矛盾を来すこともある。本研究は、分析対象の物語を申命記史家（仮説的な「申命記史」の著者）が編纂した事実上「最終形態」であると仮定し、二つのアプローチを懸架するものとしてテキストのポリフォニーを分析するバフチンの対話主義を用いて、これらのアプローチを総合しようと試みる。

(2) 論文の評価

本研究は、英語、ドイツ語、フランス語で書かれた広範な二次文献を参照しつつ、アケメネス朝ペルシア時代の社会的・政治的コンテクストに照らして旧約聖書の預言者物語を考察し、物語著者が当時の問題に対処するための文学的装置として、過去の出来事に仮託した物語を著した背景を明らかにした労作である。本研究は、預言者物語の機能に関する学界の議論に重要な寄与を果たすであろう。二つのアプローチを総合しようとする意欲的な方法も肯定的に評価できる。本研究は英語を改善し、反偶像主義、議論となっている神の正体、預言の自律性といった、物語に埋め込まれた主題をも考慮に入れることによって学界へのさらなる貢献を果たすことが可能となるであろう。加えて、文学的依存、物語の起源、成立年代、編集史へのより注意深い目配りも望まれる。

以上